



郷土史

ていね

第 119 号

平成 29 年 11 月 8 日

手稲郷土史研究会

平成 29 年 9 月 13 日(水)定例会要旨

新川がつくられた

北海道開拓の村

学芸員 細川 健裕 氏

私の調査活動の中で新川に関する資料に出会ったのは全くの別件を追っている中でのことでした。それは、「麦酒」の流通経路について創成川を調べていたときです。そもそも「新川」という名称は人工的な河川等に便宜的に付されてきた名称で、札幌近郊だけでも複数の「新川」という名を確認することができます。そのような中、琴似より手稲を通り小樽内川に合流して日本海へと流れる「新川」は河川の名称として確立し、流入する他の河川をまとめる形で水系を認められている特殊な存在となっています。

ここでは「新川」について、明治初期における札幌の物流インフラとしての運河、耕作適地の拡大を目指す排水路の両面に注目してみます。北海道大学の横から銭函に向かい一直線にのびる新川。資料により竣工時期が異なるこの人工河川は、排水・運河・治水など様々な役割を期待され、整備が進められたようです。この川がどのようにつくられたのかを、主に明治期の関連資料をもとに考えます。多くの文献はこの新川がつくられたのは明治 19 年・20 年のことと伝えています。しかし、明治 17 年からとするものや明治 30 年説など異説もあり、そもそも明治初期札幌の物流はどうなっていたかということ、当然飛行機や車の無い時代ですから徒歩、馬車、船といった限られた手段となります。

銭函千歳を結ぶ道路として開設し、明治初期の札幌への主要道として期待されたものの、湿地が多く幾度も改修を余儀なくされた札幌越新道。1871(明治 4)年に開通し当時の石狩国札幌と胆振国尾去別とを結んだ本願寺道路。1872(明治 5)年、1873(明 6)年に函館から札幌までを結んだ札幌本道といった道路が整備されますが、大量の物資を運ぶには課題の多いものでした。

1980(明治 13)年 11 月には手宮(小樽)札幌間に鉄道が開通、1982(明治 15)年 11 月には幌内(三笠)までが全通し、先にお話した「麦酒」などは鉄道を利用した輸送に切り替わります。しかし、本数が限られ、相応の運賃が必要な鉄道が全ての物資を賄うことにはなりませんでした。



そこで水運です。当時、北海道外との物流においては人員、物資とも海路を利用していたので、港の整備とそこからの運送経路として河川の利用が計画・実践されています。この計画は、1870(明治 3)年佐々木貫三にみられるものですが、私はまだこの文書を確認しておらず、今回詳細を紹介できないことをお詫びしております。当時の計画を知るものとして北海道立図書館が所蔵する資料で 1871(明治 4)年の新川開鑿建議をご覧ください。石狩川や札幌本府が確認できると思います。

札幌本府と書かれた枠の右側に「新川」と記されていますが、これは位置的に「大友掘り」ということになるでしょう。注目していただきたいのは琴似川から銭函方面「ホンナイ」までひかれた赤い線です。現在の新川よりも長い水路の開鑿を計画したことがはっきりと認識できる面白い資料だと思えます。

道路を示す赤い点線が、各地の湿地を避けて蛇行せざるを得ない中、鉄道の存在を認識しない当時の人々にとっては大きな期待がかかった水路であったと思われます。しかし、この計画は実現せずに消えています。

札幌本府の建設を主導した島義勇の罷免にも関係があるかもしれませんが、裏付けとなる資料に乏しく推測に過ぎません。なお、島義勇罷免の主因と言われる開拓資金の浪費は、当時石狩を管轄した兵部省と開拓使との関係性の悪さから石狩での荷揚げを避け、物資の輸送費が高かついたことが一因に挙げられるなど、明治初期の人々にとっての輸送路確保がどれだけ重要であったか想像に難くありません。

因みに、北海道全域が開拓使の所管となって間もなく、現在の創成川となる水路整備が進められるなど、石狩との物資連絡が札幌の流通の大動脈となりました。さて、新川はいつつくられたのでしょうか。1909(明治 42)年の北海道庁本庁舎の火災等の影響か、この時期の資料はあまり残されておらず確認は難しいのですが、今日は新渡戸稲造による「農学士藤田三九郎傳」を紹介します。

早逝してしまうため現在では名前を聞くことはほとんどありませんが、新渡戸稲造や廣井勇、内村鑑三など同期の藤田三九郎は、活躍を続けていれば大きな事業を担当したでしょうし、藤田の手掛けた代表的な仕事として軽川排水(新川)の開鑿事業も今以上に注目されたかもしれません。藤田は配布資料の表に示したように、1883(明治 16)年頃に札幌農学校教師のブルックスより排水用掘割測量の委託を受けていることから、新川の開削工事を 1884(明治 17)年から 1887(明治 20)年とする資料があるのはこの流れとも受け取ることができます。ただ、「翌二十年に至りて粗々完成したり」との表記からも窺える通り、その後も改修・改良が必要だったと考えられ、明治 21 年、明治 25 年の北海道毎日新聞の記事をご覧くださいと大排水への住民の期待の高さが確認できます。しかし、具体的な新川の状態もしくは工事の進展状況の情報是不明です。続いての情報として紹介するのが、1893(明治 26)年北海道庁長官北垣国道による『北海道開拓意見』です。この中では北海道内で進めるべき拓殖事業の一つとして大小排水の土木工事を計画しており、琵琶湖疏水で知られる北垣長官の意気込みがうかがえます。この計画を受けたのは石狩川の治水などで知られる札幌農学校出身の岡崎文吉です。

次回定例会の予定

「紅葉山砂丘について」
釣本 峰雄 会員
12月13日(水)
6時15分
区民センター
視聴覚

1897(明治 30)年前後に岡崎により花畔・銭函間運河が開鑿されたことはよく知られていますが。この工事に関する資料には取水・排水の関係で新川の名前も散見され、併せて改修など手が加えられたものと考えられます。明治 30 年完成説はこの工事を指すものではないかと推測するわけです。

平成29年10月11日(水)定例会講演要旨

手稲の昔の植生をさぐる

～手稲低平地における原植生を読み解く～

手稲郷土史研究会会員(中央区在住)

(株)福田水文センター 菊地 敦司

かつて明治期以前の石狩川下流域における低平地は、広大な面積がハンノキ、ヤチダモなどで構成される湿地林と呼ばれる樹林や、湿原で覆われていたと考えられている。しかし、開拓期を迎え人々の入植が始まると同時に、それら石狩低地帯における低平地の原植生は、一部を除きほとんど記録されないまま失われ、今日に至っている。



軽川と呼ばれた手稲は、北海道開拓使が置かれた札幌と各方面を結ぶ交通の要衝として明治初頭から発展を遂げ、更に前田農場をはじめとする酪農業が栄え、広大な面積が牧草地として転換された。

その後、昭和初期の酪農業の陰り、手稲鉱山の開発による発展、戦後の復興・経済成長、手稲町の札幌市合併や札幌オリンピックの開催に伴う人口増加など、急速な発展を受け草地の宅地化が急激に進み、ほぼ現在のまちなみが形成された。以上の背景により、手稲の低平地の原植生はほとんど記録されておらず、手稲における植物関連の研究報告や文献は、手稲山に関するものがほとんどである。手稲に長年居住する住民においても、かつて湿地であった程度の漠然としたイメージしか認識されておらず、その具体的な植生や植物相について論じられることはほとんどない。

以上のような背景から、本講では各種文献等の断片的な記録から、手稲における低平地の原植生について考察を試みた。

かつて石狩低地帯の低平地は泥炭地が広がり、広大な湿原が形成されていたと考えられている。

既往文献^{※1}によると、開発以前の湿原は約5万5千 ha で、現在残った湿原は元の0.2%程度とごく僅かな面積である。現在の手稲に湿原環境を有する植生は皆無であり、その片鱗を現地状況からたどることは難しい状況にある。

手稲の地形は、手稲連峰を源とする星置川、軽川、三樽別川、発寒川など多くの中、小河川が山裾から平野めがけて流下しており、一帯の原野が河川からの豊富な水分供給によって、排水が困難な湿地帯であったことが、手稲の由来であるアイヌ語[ティネ・イ：濡れている所]からも明らかであり、想像に難くない。

さらに既往の地質図^{※2}を読み解くと、現在の曙、前田、稲積、発寒地区など近辺は「ヨシ泥炭」「ホロムイヌゲ、ハンノキ泥炭」と示されており、当該地域はヨシやスゲ類からなる植生が発達する fen（フェン）と呼ばれる低位泥炭地と湿地林であったと推察することができる。また、既往文献^{※3}によると、北海道における低位泥炭地の植生群集の主要構成種はヨシ、イワノガリヤス、ヤラメスゲ、オオカサスゲ、ムジナスゲ、ツルスゲと示されていることから、手稲の低平地における主要構成種も同様であった可能性が高いと考えられる。これらに近い植生・植物相は、今日において石狩市のマクンベツ湿原内のヨシ群落に見出すことができる。湿地の植生が失われた今日の手稲において、私たちが目を向ける自然とは、ミスバショウやカタクリなど、美しく綺麗な草花であったり、身近な自然を提供する樹林そのものなどに目をとられがちである。しかし、本来の自然の偉大さや美しさとは、個々の生物ではなく、その集合体であり、それは植生を基盤に他の動物や菌類、微生物を包括した生態系そのものである。

これまで、あまり意識することのなかった開拓時代に不毛の土地と言われ、湿地に生育していた、ヨシやスゲ類といった手稲の失われた原植生を再確認することにより、これからの手稲に必要な自然とは何かを各々で考えて頂ければ幸いである。

【参考文献】

※1 湿原の植物誌 富士田祐子
京大出版会 2017

※2 1/5000 地質図 札幌
北海道地下資源調査所 1954

※3 日本植生誌北海道
宮脇ら 至文堂 1988

札幌市・手稲町 合併50周年記念
ふるさと手稲ヒストリー
郷土の歴史を子どもたちに「未来に！」

「ふるさと手稲」の歴史を伝えるために、手稲区役所内緑土資料コーナー（1F）で展示されています。

手稲区民ホール（区役所2F）
★定員満席・予約が必要です。
展示会場へお越しください。

北海道150周年記念講演
北海道の開拓と土壌移行
三浦 泰之

手稲町史編纂
手稲の郷土史を振り返り、
「未来」を築いていく。

TEL 011-884-3834（連絡先）まで

郷土の歴史を子どもたちに「未来に！」
札幌市・手稲町合併50周年記念事業
ふるさと手稲ヒストリー

記念事業のあらまし

手稲記念館収蔵品移動展示会
平成29年11月11日（水）～12日（木）
場所 JR手稲駅自由通路「あいくる」
手稲区役所内緑土資料コーナー（1F）

札幌市・手稲町合併50周年記念講演会
平成29年11月11日（水）14:00～16:30
場所 手稲区民ホール（手稲区役所2F）

郷土誌「いね100号」記念号予約刊行
●A4版・約300ページ（一部カラー）
200部発行・1冊2,000円（税込）

「北海道の開拓と土壌移行」をテーマに、北海道が大きく変わった時代の興味深いお話を中心とした（北海道博物館）にしています。講演に先立ち、手稲郷土史研究会より、会場の活動のあらましと今後の展望についてご案内をさせていただきます。

手稲には昔、縄文人が暮らしていました。3500年前の手稲遺跡の出土品や、幕末から近代にかけての歴史的資料の数々など、手稲のタイムトラベルを体感しませんか。

手稲土器が発見された縄文時代から縄文時代を経て、手稲は長くアイヌの人々の土地でした。良好な漁場であった小樽・手稲・石狩流域は江戸時代に松前藩の交易拠点として繁栄が続き、アイヌの人々との争いや争いを経て、現在につながる手稲の歴史が始まります。観音堂が北海道と命名され、札幌に道庁が置かれるのは、明治2（1869）年のことです。

昭和41年（合併前年）の手稲町の様子を描いた鳥瞰図

①札幌市手稲区第11と第22条の上手稲神社・第5号線5号線手稲町町役場・手稲町新川野手稲山神社
②北海道工業大学バスターミナル
③手稲区民ホール（区役所2F）
④手稲区役所内緑土資料コーナー（1F）
⑤手稲区民ホール（区役所2F）
⑥手稲区民ホール（区役所2F）

主催：手稲郷土史研究会

手稲郷土史研究会・手稲記念館移動展示実行委員会